

会 長 挨 拶

岩永 弘人

「定年退職あるある」ですが、週一でプールに通っています。魚座のせいかわたし水に関係のある水泳とスキーは好きなのですが、スクールに入るわけでもなく、自分で勝手にゆっくりと平で500から700くらい泳ぎます。体を動かす事が目的で、水泳がうまくなるのが目的ではないのですが、いざ通ってみると何とそこにも学会や大学と同じような「社会」が存在しました！

僕が通っているプールでは「ゆっくり泳ぐ」コースと「はやく泳ぐ」コースが分かれています。このシステムは以下の2つ問題を生じさせます。まず「はやい」とはどれくらいのスピードか。「ゆっくり」とは。その「ゆっくり」のコースに（僕からみると）「はやい」人（大体は若者か子供）が泳ぎにきます。こちらとしては「ここはゆっくりのコースなんだけど。。。」「と思っても監視人は何も言いません。一方、僕が間違って「はやい」の方で泳いでいると、監視人はちゃんと文句を言いに来ました。社会です。「やり直しがきく社会」になどと言われている割には、社会は弱い人、遅い人には冷たいなど実感させられます。

もう1つの問題は同じ「ゆっくり」コースの中でも、ちょっと早い人、普通に遅い人、とても遅い人（もちろん僕はこのカテゴリー）の3つくらいに分かれるという点です。当然何周かするうちに周回遅れが生じ、後ろからくるちょっと早い人のクロールの手が、僕の足に当たることになります。社会です。一方気配りしてくれる人もいて、こちらが遅いことに気づくと、僕が25メートルプールの向こう岸で待っていてくれて、こちらがターンすると向こうも出発してくれたりもします。

と、何だか extended metaphor (アレゴリー?) みたいになってしまいましたが、深い意味はありません。ただ、やっと仕事や学会活動から離れて他人に気を使わずに生きれると思っていたら、結局どこに行っても同じである事がわかってしまったというお話です。そしてそれがわかったおかげで、学会の方が同ジャンルの人が集まっている分だけまだましかな、と思えるようになってきました。という事で、あと半年会長を頑張りたいと思います。編集委員の皆様のおかげで、秋には論集も無事上梓されとのこと。オンライン・ジャーナルについての継続議論（次の NL に詳細なご提案を掲載予定です）も、引き続きよろしくお願いいたします。

1. 全国大会・総会について

今年度の全国大会（第14回大会）および総会は、**2025年9月14日（日）**に**東北福祉大学仙台駅東口キャンパス**にて開催予定しております。また、懇親会も開催予定しております。ふるってご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

2. 編集委員会からのお知らせ 一論集21巻『十七世紀英文学と世界』について

第21巻『十七世紀英文学と世界』（*Seventeenth Century English Literature and the Worlds*）は、締め切りまでに、若手研究者からベテラン研究者まで16名の皆様より応募いただき、現在、査読作業を行っております。2025年度全国大会の前には発刊できるよう、金星堂さまとご相談をしておりますので、会員の皆様にはぜひ楽しみにお待ちいただければと思います。論集21巻が刊行されましたあかつきには、次の3点について会員の皆様にご理解をお願いいたします。

1. 執筆者は各自5冊のご購入をお願いします。
2. 執筆者以外の会員は、各人1冊ご購入をお願いします。所属大学の図書館でのご購入も積極的にご検討ください。なお、執筆者の方は、5冊ご購入とは別に執筆料として各自1万円のご負担をお願いします（学生会員は負担無し）。
3. 金星堂のテキストを可能な限りご採用ください。

3. 会計報告（速報版）

2024年度の会計報告を以下に記します。会員の皆様には会費納入へのご協力をお願い申し上げます。

2024年度（2024年4月1日～2025年3月31日）

収入		支出	
前年度からの繰り越し	1,208,068	通信・事務費（封筒・切手・振込手数料）	40,072
会費収入 東北支部	42,000	HP更新費用	33,600
東京支部	138,000	振込手数料	220
関西支部	81,000		
郵便貯金利子	570		
計	1,469,638	計	73,892

次年度繰越金 1,395,746円 （2025年5月5日）

*正式な会計監査付きの資料は総会資料としてあらためて配布いたします。

4. ホームページおよび X（旧 Twitter）のお知らせ

当学会のホームページ(HP) は金星堂のご協力のもとに学会 HP 委員が運営・管理しております。

<http://www.kinsei-do.co.jp/S17CEL/>

「会員による新刊情報」や「会員による最新研究情報」などの HP 掲載データは年 2 回更新します。原則として 4 月末に各支部事務局、11 月末にホームページ委員が、掲載データを取りまとめます。研究業績を内外に知らせる良い機会となりますので、最新データの提出にご協力をお願いいたします。

また、学会 X（旧 Twitter、十七世紀英文学会（公式）@S17CEL）ではホームページよりも早く最新情報を掲載しています。フォローおよび最新情報のご確認を随時お願いいたします。

教員公募情報受け付けおよびツイッター配信のお知らせ

学会 X（旧ツイッター）では、国公立私立の大学、短大、それに準じる教育・研究機関から当学会に寄せられた英語英文学関係専任職の公募情報を配信しております。情報をお寄せいただいた順に、大学の公募ホームページあるいは研究者人材データベース（JREC-IN）へのリンクを掲載いたします。掲載を希望される場合には、本部事務局宛てにメールにて応募締め切りとともにお知らせください。なお、ウェブサイトへのリンクがない場合は、PDF データを添付ファイルにてお送りください。

5. 2024 年度支部活動報告

東北支部 活動報告・発表要旨

2024 年 11 月 9 日	青木 愛美	メアリ・ロウスの描き方：視覚的表現を通した世界観の形成
2024 年 11 月 9 日	梶 理和子	なぜアフラ・ベーンは悲劇を 1 つしか上演しなかったのか
2025 年 3 月 23 日	川田 潤	ウィリアム・ペティと長い 18 世紀

メアリ・ロウスの描き方：視覚的表現を通した世界観の形成

青木 愛美

本発表では、17 世紀イングランドの女性作家メアリ・ロウス（Mary Wroth）の作品における視覚的表現の特徴に着目し、女性の「語り」と「沈黙」が共存する表現空間の形成について考察した。とりわけ、彼女の詩の語り手であり、散文ロマンス『ユーレイニア』にも登場するパンフィリアの内面とその視覚的な再 4 現に注目し、ロウスが女性の美德（obedience, silence, chastity）という社会的規範のもとで、いかに主体性を確立しようとしたかを明らかにした。

まず、ロウスの詩における「黒」の視覚的イメージを手がかりに、パンフィリアの感情の在りかを探った。従来の恋愛詩における視覚的表現、特に伯父であるフィリップ・シドニーの『アストロフェルとステラ』との比較を通じて、ロウスが「暗闇」や「黒」を主要な視覚記号として用い、読み手の視線を

内面から外へと誘導している点を指摘した。ここでの「黒」は単なる悲しみの象徴ではなく、女性の感情を隠しつつも、それをほのめかす両義的な装置として機能している。

続いて、私的空間における自己表現の形態に注目し、視覚的行為と詩作の交差を検証した。『ユーレイニア』においてパンフィリアは、自然の中で詩を木に刻み、視覚的・物質的な方法で苦悩を表現し、内面の声を風景と融合させていく。また、衣服の刺繍や柳の枝といった装飾的要素も内面を可視化する手段となり、詩作と針仕事の融合が女性の表現形態として提示される。迷宮や庭といった空間は、創作と主体性の拠点として描かれ、ロウスはこうした視覚的モチーフを通じて、従来の男性中心的な詩の慣習に対抗する女性的な表現の場を構築している。

このように、ロウスの作品における視覚的表現は、女性の沈黙が支配する空間において、感情や主体性を語る手段として機能している。ロウスは詩的伝統に身を置きながらも、自然描写や装飾、刺繍といった素材を詩作に取り込み、女性が語りうる空間を視覚のなかに創出したのである。彼女の作品は、家父長制的価値観のもとで女性が生み出す詩的沈黙と視覚的語りを融合させたものであり、その複雑な表現構造こそが、初期近代女性文学の一つの特徴といえるのではないだろうか。

主要参考文献

- Frye, Susan. *Pens and Needles: Women's Textualities in Early Modern England*. University of Pennsylvania Press, 2010.
- Fumerton, Patricia. *Cultural Aesthetics: Renaissance Literature and the Practice of Social Ornament*. The University of Chicago Press, 1991.
- Lamb, Mary Ellen. Introduction. *The Countess of Montgomery's Urania (Abridged)*, by Mary Wroth, ACMRS (Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies), 2011.
- Masten, Jeff. "‘Shall I turne blabb?’: Circulation, Gender, and Subjectivity in Mary Wroth's Sonnets." *Reading Mary Wroth: Representing Alternatives in Early Modern England*, edited by Naomi J. Miller and Gary Waller, The University of Tennessee P, 1991, pp. 67-87.
- Miller, Shannon. "Constructing the Female Self: Architectural Structures in Mary Wroth's *Urania*." *Renaissance Culture and the Everyday*, edited by Patricia Fumerton and Simon Hunt, University of Pennsylvania Press, 1999, pp. 139-61.
- Munroe, Jennifer. *Gender and the Garden in Early Modern English Literature*. Routledge, 2016.
- Roberts, J. A. (ed.), *The Poems of Lady Mary Wroth*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983.
- Sidney, Philip. *The poems of Sir Philip Sidney*. Edited by William A. Ringler, jr, Oxford UP, 1962.

なぜアフラ・ベーンは悲劇を1つしか上演しなかったのか

梶 理和子

アフラ・ベーン (Aphra Behn, 1640-1689) は、1670年にはじまる劇作家のキャリア初期において悲喜劇、喜劇、そして悲劇とさまざまなジャンルを用いたが、1676年に初演された *Abdelazer, or The Moor's Revenge. A Tragedy* 以降、もっぱら喜劇的作品を制作し、二度と悲劇を上演することはなかった。当時の演劇ジャンルの流行や社会情勢を踏まえ、興行的成功を収めるための選択であったことは確かであろうが、本発表では、女性キャラクターの描写やプロットに関わる悲劇の限界を、喜劇の女性表象との違い

を意識しながら、ベーン唯一の悲劇 *Abdelazer* に探った。

かつて王子であったムーア人、アブデラザールはスペイン王室に復讐するため、その情欲から彼の企みに加担する王妃と、彼の貞淑な妻を道具に、国王、王位継承者たちを殺害し、王位を奪おうとする。その中で、王妃は王室の血統を断ち切る、国家秩序を乱す悪魔的女性として、妻は美德ある犠牲者として、いずれも殺される。性的・政治的に自ら逸脱する女性も、従順で誠実な女性も、悲劇の枠組みの中では秩序の回復のために排除される。一方、ベーンの喜劇では、女性キャラクターが変装や策略を駆使しながら逸脱的な性的・社会的欲望を追求するが、このような能動性は肯定され、社会的承認をもたらし得る重要な要素として機能する。

このように、国家や王位をめぐる物語、悲劇は女性を「排除」や「殉教」という形で退出させる。そして、女性の能動性が悲劇では「死と破滅」に、喜劇では「生存と成功」と対照的な結末にたどり着くように、喜劇は女性の自由や欲望をポジティブに描ける構造を持ち、女性表象を制約する悲劇の限界を超える場であったと考えられる。

参考文献

- Behn, Aphra. *Abdelazer, or The Moor's Revenge. A Tragedy. The Works of Aphra Behn*, edited by Janet Todd, vol. 5, Ohio State UP, 1996, pp. 239-315.
- . *The Rover. Or The Banish't Cavaliers. The Works of Aphra Behn*, edited by Janet Todd, vol. 5, Ohio State UP, 1996, pp. 445-521.
- Birchwood, Matthew. "'Puritan Mahumetans': Reading Anglo-Muslim Context in Aphra Behn's *Abdelazer* and *The False Count*." *Women's Writing*, vol.27, no.3, 2020, pp.294-309.
- Fisk, Deborah Payne, editor. *The Cambridge to Companion to English Restoration Theatre*, Cambridge UP, 2000.
- Hayden, Judy A. *Of Love and War: The Political Voice in the Early Plays of Aphra Behn*. Rodopi, 2010.
- Hermanson, Anne. *The Horror Plays of the English Restoration*. Routledge, 2014.
- Hughes, Derek, and Janet Todd, editors. *The Cambridge Companion to Aphra Behn*. Cambridge UP, 2004.
- . *The Theatre of Aphra Behn*. Palgrave, 2002.
- Maguire, Nancy Klein. "Tragicomedy." *The Cambridge to Companion to English Restoration Theatre*, edited by Deborah Payne Fisk, Cambridge UP, 2000, pp.86-106.
- Markley, Robert. "Behn and the unstable traditions of social comedy." *The Cambridge Companion to Aphra Behn*, edited by Derek Hughes and Janet Todd, Cambridge UP, 2004, pp.98-117.
- Marsden, Jean I. "Spectacle, horror, and pathos." *The Cambridge to Companion to English Restoration Theatre*, edited by Deborah Payne Fisk, Cambridge UP, 2000, pp.174-90.
- Owen, Susan. "Behn's dramatic response to Restoration politics." *The Cambridge Companion to Aphra Behn*, edited by Derek Hughes and Janet Todd, Cambridge UP, 2004, pp.68-82.
- Todd, Janet, editor. *The Works of Aphra Behn*. Ohio State UP, 1992-96, 7vols.
- , and Derek Hughes. "Tragedy and tragicomedy." *The Cambridge Companion to Aphra Behn*, edited by Derek Hughes and Janet Todd, Cambridge UP, 2004, pp.83-97.
- . *Aphra Behn: A Secret Life*. Kindle ed., Bloomsbury Reader, 2017.
- Wroughton, John. *The Routledge Companion to the Stuart Age, 1603-1714*. Routledge, 2006.

本発表では、長い 18 世紀におけるウィリアム・ペティ (William Petty, 1623-87) をめぐる経済、国家、主体との関係、その英語文学・文化研究における意味について検討を行った。

まず、ペティの文学・文化研究における批評的意味を確認する作業を行った。第一に、ペティとハートリブ・サークルとの結びつきを確認し、ペティが国家について語る際、「数字」等だけではなく、政治・経済を語る言説様式をつくりあげていることが重要だということを示した。第二に、経済 (史) 学でのペティの位置づけにおけるアダム・スミスへの影響の有無の評価を確認した上で、商業社会における共和主義研究というポーコックの研究との結びつきを提示した。第三にそのような研究と近代商業社会への不安／信用をめぐる言説を分析する「新経済批評」の特徴を明らかにした。

このような批評的意味を確認した上で、ペティとスウィフトのテキストを併置して、スウィフトの重商主義的特徴を明らかにした研究の重要性を確認した上で、ペティの『政治算術』の分析を行い、以下のことを指摘した。第一に、『政治算術』は確かに数字を用いて「証明する」という数学的手法をとっているが、実際には厳密な意味での分析的正確性は存在せず、数字の重要性は、国家、財政、国際、フィクションという従来別々のジャンルを同時に考えるための言説空間を作りあげている点にあること。第二に、『政治算術』には、ある価値を信用すべきかどうかという経済・貨幣の不安定性を捉える視点が不在であり、無意識／意識的に、価値の流動性と信用経済の不安定性の消去が行われていること。第三に、『政治算術』は基本的に個人の内面については不問＝不在とし、外面・行動としての勤勉を求め、それを「効率」の概念と結びつけ、公共の利益に資するよう推奨する結果、個人の内面という不安定要素は不在となること。以上の 3 点を踏まえ、最終的には、『政治算術』が、数字という枠で束ねられた国家、経済、国土、商業という異なるジャンルの統合を可能とする新たなジャンルのテキストであることを明らかにした。ペティのこのようなジャンルの混淆が誕生したからこそ、そこに欠けている信用経済の不安定性、個人の内面の不安定性・非合理性の問題がやがて明らかになり、その問題系がスコットランド啓蒙主義で展開するということをまとめとした。

Bibliography

- 大倉正雄「ウィリアム・ペティと経済科学の曙 (1)」『政治・経済・法律研究』Vol.23. no.2, 2021, pp.41-96.
- 「ウィリアム・ペティと経済科学の曙 (2)」『政治・経済・法律研究』Vol.24. no.2, 2022, pp.23-88.
- 「ウィリアム・ペティと経済科学の曙 (3)」『政治・経済・法律研究』Vol.24. no.2, 2023, pp.35-87.
- 大河内昌『美学イデオロギー—商業社会における想像力』名古屋大学出版局, 2019 年.
- 佐藤有史「19 世紀におけるウィリアム・ペティの「再発見」—スコットランド啓蒙の黄昏とリカーディアンたち—」『立教経済学研究』第 76 巻第 4 号, 2023 年, pp.59-80.
- 西山徹『ジョナサン・スウィフトと重商主義』岡山商科大学, 2004 年.
- ポーコック, J・G・A『マキャヴェリアン・モーメント』田中秀夫他訳 名古屋大学出版会, 2008.
- Cook, Eli. "The Pricing of Everyday Life." *Raritan*, vol.32, no.3, 2013, pp.109-21.
- Goodacre, Hugh. "Technological progress and economic analysis from Petty to Smith." *European Journal of the History of Economic Thought*, vol.17, no.5, 2010, pp.1149-68.

- Greengrass, Mark, Michael Leslie and Tomothy Raylor editors. *Samuel Hartlib and Universal Reformation: Studies in intellectual communication*. Cambridge UP, 1994.
- McCormick, Ted. “Governing Model Populations: Queries, Quantification, and William Petty’s “Scale of Salubrity.”” *History of Science*, vol.51, 2013, pp.179-97.
- Sheldon, Ryan Kaveh. “How to Read by Numbers: Plague, Political Arithmetic and the Production of History.” *Eighteenth Century: Theory & Interpretation*, vol.61, no.3, 2020, pp.391-410.
- Sivado, Akos. The ontology of Sir William Petty’s political arithmetic. *The European Journal of the History of Economic Thought*, vol.26, no.5, 2019, pp.1003-26.
- . “Resurrecting the Body Politic – Physiology’s Influence on Sir William Petty’s *Political Arithmetick*.” *Early Science and Medicine*, vol.22, 2017, pp.157-82.

東京支部 活動報告・発表要旨

2024 年 12 月 21 日	穴本 玲奈	フランシス・ゴドウィンの『月の男』における空中移動の実験的探究
2025 年 3 月 22 日	岩永 弘人	ペトルルカ作、サミュエル・ダニエル訳： “ <i>The Prayse of Private Life</i> ”について
2025 年 3 月 22 日	——	17 世紀研究 この一冊

フランシス・ゴドウィンの『月の男』における空中移動の実験的探究

穴本 玲奈

『月の男』は、英国の聖職者・作家のフランシス・ゴドウィンが著し、1638 年に死後出版された散文作品である。同作が執筆された 1620 年代までに、ヨーロッパでは月面観測が飛躍的に進展していた。ガリレオ・ガリレイは 1609 年に改良された望遠鏡で月面を観測し、『星界の報告』として発表した。英国ではウィリアム・ギルバートが『磁石について』（1600）で月面地理を論じ、トマス・ハリオットが簡単な月面のスケッチを行った。このように、月面観測の発展は、天文学者や地理学者に月面の描画や月面地図の制作を促した。さらに、古代ギリシャの「月の居住可能性」についての議論が再燃し、大航海時代と望遠鏡技術の進展が従来の宇宙観を革新した。この科学的・思想的背景の中で、『月の男』は執筆されたのである。本発表では、月旅行を題材とした文学作品における月への飛行手段を比較し、ゴドウィンの飛行装置の独自性と、それが同時代の科学思想およびゴドウィン自身の宗教観とどのように結びついているのかを明らかにした。

同作では、主人公ゴンザレスが渡り鳥を用いた自作の飛行装置で月へと運ばれる。この飛行装置は、段階的な実験と改良を経て完成する。この開発過程は、物語の空想性を排除し、科学的な実証実験を想起させる。ゴンザレスの月旅行は、当初から計画されたものではなく、自然の力を理解しようとする好奇心から生まれたものである。こうした飛行装置や迅速な遠隔移動に関する探求を通じて、ゴドウィンは科学が人類の利益のために活用されることへの期待と、自然の理解がもたらす宗教的意義を強調している。そして、人間が実験的に飛行装置を開発する過程や、月旅行を通じて新たな知識を得る物語の展開は、人間の理性によって神の知恵を理解しようとするゴドウィンの宗教的姿勢を体現していると言え

るだろう。

主要参考文献

- Butler, John Anthony, 'Introduction' in Francis Godwin, *The Man in the Moon*, ed. by John Anthony Butler (Dovehouse Editions Inc., 1995), pp. 11–6
- Campbell, Mary Baine, 'Speedy Messengers: Fiction, Cryptography, Space Travel, and Francis Godwin's The Man in the Moone', *The Yearbook of English Studies*, 41.1, (2011), pp. 190–204
- Cormack, Lesley B., *Charting an Empire: Geography at the English Universities, 1580–1620* (University of Chicago Press, 1997)
- Cressy, David, 'Early Modern Space Travel and the English Man in the Moon', in *Literature in the Age of Celestial Discovery: From Copernicus to Flamsteed*, ed. by Judy A. Hayden, 1st edn (Palgrave Macmillan, 2016), pp. 45–73
- Galilei, Galileo, *Sidereus Nuncius* (Venice, 1610) USTC 4021754
- Godwin, Francis, *The Man in the Moone; or, A Discoverse of a Voyage Thither by Domingo Gonsales the Speedy Messenger*, (London, 1638) STC (2nd ed.) 11943.5
- Kepler, Johannes, *Somnium, seu Opus Posthumum de Astronomia Lunari*, (Frankfurt am Main, 1634) USTC 2113381
- Lawton, H. W., 'Bishop Godwin's Man in the Moone', *The Review of English Studies*, 7.25 (1931), pp. 23–55
- Martin, Catherine Gimelli, 'Sailing to the Moon: Francis Bacon, Francis Godwin and the First Science Fiction', in *Literature in the Age of Celestial Discovery From Copernicus to Flamsteed*, ed. by Judy A. Hayden, 1st edn (Palgrave Macmillan, 2016), pp. 109–32
- McColley, Grant, 'The Date of Godwin's "Domingo Gonsales"', *Modern Philology*, 35.1 (University of Chicago Press, 1937), pp. 47–60
- Montgomery, Scott L., *The Moon and the Western Imagination* (University of Arizona Press, 1999)
- Whitaker, Ewen A., *Mapping and Naming the Moon: A History of Lunar Cartography and Nomenclature* (Cambridge University Press, 1999)
- フランシス・ゴドウィン「月の男」、『ユートピア旅行記叢書』2、大西洋一訳、岩波書店、1998年

ペトルルカ作、サミュエル・ダニエル訳：“*The Prayse of Private Life*”について

岩永 弘人

詩人サミュエル・ダニエル（1562～1619）はシドニーグループに属し、メアリー・ハーバートの庇護を受けていた詩人という印象が強いが、1590年前後にクリフォード家とも深い関係を持っていた。特に、メアリーの娘アンの家庭教師としてスキップトン城に住んだことは彼の人生にとって大きな転機となった。そんなダニエルが、クリフォード家の女性たちにペトルルカの翻訳を贈呈した事はよく知られている。それはペトルルカの *De vita solitaria* の翻訳（翻案）である *The prayse of private life* である。（この作品は、20世紀の初めまでずっとサー・ジョン・ハリントン作とされてきたが、それが活字にされた事でオーサーシップについて議論が高まり、今ではダニエル作とする批評家が多い。）

この作品はペトルルカの原作から敬虔なクリフォード家の女性たちを読者に想定したネオストイシズム的な部分を選び、翻訳、再構成したものである。（ダニエル独自の章もある。）本発表ではこの訳で特徴的と思われる（1）神の偏在、（2）老齢と欲望、にあたる部分に焦点をあて、その特徴を考え

てみた。その後、この作品とダニエルの抒情詩（特にソネット）との関連を見るため「ロザモンドの嘆き」と比較し、ダニエルのペトラルカ受容のありようを見てみた。この作品で歌われているロザモンドも、実はクリフォード家との関わりが強く、その家名復興の意味も込めてこの詩が「ディーリア」に添えられたという事実は意義深い。

<主要参考文献表>

- Carraud, Christophe. (trans.) *Petrarque: De vita Solitaria (La vie solitaire)*. Grenoble: Millon, 2012.
- Kendal Record Office. WD/Hoth/A988/21. [Microfilm]
- McClure, Norman Egbert. (ed.) *The Letters and Epigrams of Sir John Harington together with 'The Prayse of Private Life'*, Philadelphia: Univ of Pennsylvania Press, 1930.
- Moore, Scott H. (ed.), Jacob Zeitlin (trans.) *Petrarch: The Life of Solitude*. Waco, Texas: Baylor UP, 2023.
- Pitcher, John. "Margaret, Countess of Cumberland's The Prayse of Private Life, Presented by Samuel Daniel" in *In the Prayse of Writing: Early Modern Manuscript Studies*, ed. by Susan P. Cerasano and Steven May. London: British Library, 2012, 114-44.
- Sellers, H. 'Supplementary Note to "A Bibliography of the Works of Samuel Daniel"', *Proceedings and Papers of the Oxford Bibliographical Society* 2, no.4 (1930), 341-2.
- Smith G.C.Moore. 'Sir John Harington.' *TLS* 4 September 1930, 697.
- Stoll, Jessica. "Petrarch's DE VITA SOLITARIA: Samuel Daniel's Translation c.1610." *Modern Language Review*, 109 (2014), 313-32.
- 岩崎宗治編訳『サミュエル・ダニエル詩集：ソネット集ディーリア・ロザモンドの嘆き』東京：国文社、2006。
- 近藤恒一訳、ペトラルカ著『わが秘密』東京：岩波書店、1996。
- 茂泉昭男『アウグスティヌス著作集 第二巻』東京：教文館、1979。
- 高松雄一『シェイクスピア『恋人の嘆き』とその周辺』東京：英宝社、1995。

17 世紀研究 この 1 冊

2022 年度から東京支部 3 月例会でおこなうようになった「17 世紀研究 この 1 冊」も 3 回目を迎えた。今回は、同日の岩永弘人氏による研究発表が初期近代英国における「翻訳」の問題をあつかったため、それと関連した古典翻訳をめぐる文献の紹介があり、翻訳研究の重要性にかんする議論もおこなわれた。このように企画が有機的に連関することになった結果、今回は過去 2 回に比べても活発に情報交換がなされ、ますます有意義なものとなった。(文責：伊澤高志)

関西支部 活動報告・発表要旨

2024 年 6 月 15 日	丹羽 佐紀	錬金術と消費社会 —『錬金術師』におけるいかさまの効果—
2024 年 12 月 21 日	村里 好俊	サー・フィリップ・シドニー作『アーケイディア』の手稿本 と刊本をめぐって

2025 年 3 月 8 日	奥西 豊子	“You, that are shee, and you” —ジョン・ダン「ベッドフォード伯爵夫人に捧げる哀悼詩」における女性の友情—
----------------	-------	---

錬金術と消費社会 —『錬金術師』におけるいかさまの効果—

丹羽 佐紀

本発表では、ベン・ジョンソンの『錬金術師』に登場する人物たちの物欲に着目し、彼らが舞台上で繰り広げる消費行動とそれに付随する金まわりの良さが、結果的に劇場の活性化という期待に結びつけられていることを明らかにした。この劇において、ダッパー、ドラッガー、マモンをはじめ、いかさま錬金術師に惜しみなく散財する登場人物たちは皆、ひたすら自分の欲求を満たすことに夢中になり、金の支払いに躊躇することがない。それでいて劇のあらすじ全体が決して陰鬱でなく、むしろ彼らの強烈な物欲が笑いの対象として生き活きと描かれているのは、金の支払いのため必死になって舞台上を歩き来する彼らの活発な動きが、そのまま市場における交換や取引の活発な動き、また金まわりの良さを観客に印象づけるからである。

いかさま錬金術師が依頼人から巻き上げた金は、5 幕 5 場で全て家主のラブウィットの手に渡ることになるが、その金は劇の最後の場面で、観客にとって有効な形で運用されることを約束される。召使いジェレミーに早変わりした（つまり、いかさま変装を解いた）フェースは、観客に向かって「手に入れたこの金はまずお客様のために使う」とアピールするのである。一方で欲にまみれた登場人物たちが欲のために散財し、また他方で、欲にまみれた人物たちがいかさま錬金術の甘言でそれらの人物から巻き上げた金は、劇の最後において、観客にとって最も効果的に活用されるというオチになっている。いかさま錬金術は、ロンドンという、観客にとってまさに現実の都市社会が提供する、劇場文化及びエンターテインメントの活性化に直接結びつけられ、観客は、面白いかどうか分からないながらも気前よく観劇に金を払った自らの消費行動に安堵して帰途につくよう促されるのである。

当時ペストで何度も閉鎖を余儀なくされた劇場は、それでも観客がとにかく劇を観たいと足を運び、惜しみなく金を払ってくれる金払いの良さに支えられて上演を継続できた部分大きい。この劇において、欲深い登場人物たちが、結果として望みのものを何一つ得られなかったとしても、彼らの消費行動自体は、最終的に劇場・役者・観客をつなぐべく機能している。また登場人物たちも、自分たちがいかさま錬金術に騙されたことに一応不平は言うものの、今後このようなインチキは二度と信用しないといって改心する素振りを見せるわけでもない。彼らはおそらく、懲りずにまた次の美味しい話にそそられ、金をつぎ込もうとするかもしれず、こうしてこの劇において金はずっと活発にまわり続けるのである。

参考文献

- Agnew, Jean-Christophe. *Worlds Apart: The Market and the Theater in Anglo-American Thought, 1550-1750*. Cambridge: CUP, 1986.
- Beier, A. L. *Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*. London: Methuen, 1985.
- Bevington, David. ‘The Critical Backstory’. Eds. Erin Julian and Helen Ostovich. *The Alchemist: A Critical Reader*. London: Bloomsbury, 2019.15-42.

- Brenner, Robert. *Merchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London's Overseas Traders, 1550-1653*. London: Verso, 2003. First Published by Princeton University Press, 1993.
- Chalfant, Fran C. *Ben Jonson's London: A Jacobean Placename Dictionary*. Athens: The University of Georgia Press, 1978.
- Clement, Jennifer. *Reading Humility in Early Modern England*. London: Routledge, 2015.
- Curran, Kevin. *Marriage, Performance, and Politics at the Jacobean Court: Studies in Performance and Early Modern Drama*. Farnham: Ashgate, 2009.
- Eisenberg, Christiane. *The Rise of Market Society in England, 1066-1800*. Trans. Deborah Cohen. New York: Berghahn, 2013.
- Gifford, W. ed. *The Works of Ben Jonson, in Nine Volumes*. Vol.4. London: Printed by W. Bulmer and Co., 1816. Rpt. Kessinger Publishing. n.d.
- Gurr, Andrew. *York Notes on The Alchemist*. York Notes. Beirut: Longman York Press, 1981.
- Harp, Richard, ed. *Ben Jonson's Plays and Masques*. A Norton Critical Edition. 2nd ed. New York: W. W. Norton & Company Inc., 2001.
- Horbury, Ezra. *Prodigality in Early Modern Drama*. Cambridge: D. S. Brewer, 2019.
- Howard, Jean E. *Theater of a City: The Places of London Comedy, 1598-1642*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2007.
- Julian, Erin, and Helen Ostovich eds. *The Alchemist: A Critical Reader*. London: Bloomsbury, 2019.
- Leinwand, Theodore B. *Theatre, Finance and Society in Early Modern England*. Cambridge: CUP, 1999.
- Martin, Mathew. 'New Directions: Space, Plague and Satire in Ben Jonson's *The Alchemist*'. Erin Julian and Helen Ostovich eds. *The Alchemist: A Critical Reader*. London: Bloomsbury, 2019. 104-26.
- Rickard, Jane. *Writing the Monarch in Jacobean England: Jonson, Donne, Shakespeare and the Works of King James*. Cambridge: CUP, 2015.
- Sanders, Julie, ed. *Ben Jonson in Context*. Cambridge: CUP, 2010.
- ベン・ジョンソン『ヴォルポーネ・錬金術師』小田島雄志訳 エリザベス朝演劇集Ⅱ 白水社、1996年
和田勇一『ベン・ジョンソン 人と作品』研究社、1963年

サー・フィリップ・シドニー作『アーケイディア』の手稿本と刊本をめぐって

村里 好俊

シドニーの代表作『ニュー・アーケイディア』は、未完に終わった作品である。『アーケイディア初稿（以下、オールドと略記）』と比較すると、『オールド』は伝統的な語り的手法を採用し、筋の運びが直截で、時間的な順序に沿って展開され、一人の定まった語り手が物語を語るように書かれている。例えば、作者＝語り手が作品自体の中に急に顔を出し、読者（この場合、読者として想定されているのはシドニーの実妹であるペンブルック伯爵夫人と彼女を取り囲む貴婦人たち）や、聞き手である彼女たちに時々語り手が直接呼びかけたりする。それはまるでギリシア悲劇における舞台上のコーラスの役目を引きづっているように思われる。

『オールド』を改稿して書かれた『改訂版アーケイディア（以下、ニューと略記）』は、一層手の込んだ語り的手法が用いられている。『オールド』に大幅に加筆された『ニュー』は、謀略と船火事による二度目の難破の末、かつて小アジア地方に存在したとされるラコニア国の沖合を漂流して、ギリシアのペロポネソス半島の内陸部に位置して、ギリシア・ローマの昔から平和な理想郷として歌われた山がちの

国アルカディアに漂着する前に、主人公であるマケドニアとテッサリアの二人の従兄弟同士の王子たちが武者修行の旅の途中で小アジアの国々に遭遇する数々の冒険の次第とか、あるいは今一人の主要登場人物、アルカディア国の王であるバシリウスの弟の忘れ形見であるアムファイアラス王子の悲劇的な愛の行方と反乱の物語、そしてその母親であるセクロピア妃の王位篡奪の企み等の重要な挿話を付加して、より洗練された複雑な、いわば入れ子細工的な構造の語りの技法と、より精巧な修辭的文体を駆使して織り上げられて、『オールド』を数倍に膨らませた作品になっている。

時間的な順序に沿って伝統的な語り方をしている『オールド』に対して、『ニュー』は、叙事詩において、詩神であるミューズ神にまず祈りを捧げ、詩的靈感を授けてくれるように嘆願するのと同じく、そのミューズ神の一人と同じ名前のユレイニアという名の美しい女性への「インボケーション(invocation)」から始まる。また、構造的に、伝統的な叙事詩は「事件の核心から (in medius res)」始まるのだが、この『ニュー』も同じく「事件の核心から」始まり、それ以前の出来事、つまり小アジア地方での王子たちの武者修行の旅の様子は、回想的に作品の第二巻で語られることになる。

シドニーは『詩の擁護』の中で、叙事詩は必ずしも韻文で書く必要はない、散文で書くことも出来ると豪語し、この自説を『ニュー・アーケイディア』という作品の中で実践しているのではないだろうか。

シドニーは四つのジャンルの先駆的な作品を書いたが、生前にはそれらの作品は出版されなかった。出版は全てシドニーの死後の事である。このことからして、シドニーには自作の出版の意図はなかった、実妹のペンブルック伯爵夫人のメアリを初めとして、近しい人たちに回覧という形で読んで楽しんでもらいたかったのではないか。回覧という形で読んで貰うために、シドニーには達筆者として名高い写字生といわれる人たちが複数存在した。その人たちに依頼して、自作の原稿を写してもらい、いくつかのグループに分けて、原稿を回し読みして欲しかったのではないか。

オランダ戦線に出かける前に友人フルク・グレヴィルに未完の自筆原稿を託したのは、出版を願っての事ではなく、『オールド』を数年かけて徹底的に加筆推敲した原稿を信頼するグレヴィルに預かっておいて欲しかった。そして、もし戦地から生きて戻ってきたら、その後を書き足したかった。書き足したいという、そういう自らを奮い立たせるような気持ちで戦地から生きて戻りたい、戻って未完の原稿を完成したいという願いが込められていたのではないかと推測される。

『ニュー』は、未完ではあるが、シドニーはこれこそが自らの代表作として大切な作品であると考えていたのではないかと。ただ、その原稿を託されたグレヴィルは、高名な文学者でもある友人の生きた証として、その託された原稿を本にしてより多くの人に読んで貰い、彼の名声を広めたいと願ったのではないかと、友人として。これに激怒した実妹ペンブルック伯爵夫人のメアリは、未完成のまま出版された兄の大切な作品を不憫だと思い、『ニュー』には足りない部分を『オールド』から補足して、つまり、『オールド』の第四巻、第五巻を継ぎ足し、つじつまの合わない箇所を加筆推敲して、折衷版を無理やりに完成版として出版してしまったのではないかと。この間の事情は、敬愛する兄への思慕の情の現れと考えられるが、果たしてその事がシドニーの本心に添ったことであつたのかどうか。

シドニーが散文の叙事詩として構想した未完の『ニュー』と、伝統的な物語形式で書かれた牧歌恋愛ロマンスである『オールド』とは、言わば水と油の関係であるのに、出版されたこの『ペンブルック伯爵夫人のアーケイディア』は極めて人気が高く、一七世紀には 13 版を数えるほどポピュラーな作品になった。ある意味では、皮肉な結果とも言えよう。

シドニーが自作の出版を嫌ったのには、いくつか理由があると思われる。まずは、貴人としての自負心がある。数は少なくとも、教養のある貴人たちに、男女を問わず読んで欲しい、それも活字ではなく、達筆の筆で書かれた作品としてという願いがあったのではと思われる。

シドニーが印刷本より手稿の回覧を優先したことには様々な要因が考えられる。第一に、*stigma of print* と呼ばれるもの、つまり高位の者が自分の書いた物を、それを買う余裕のある者ならだれにでも手に入ることを潔しとしない風習である。シドニーは、結局のところ、個人的喜びのために作品を書いているのであり、誰かの庇護を勝ち取ろうとか、金儲けのために作品を売ろうとか、そんなことを当てにしていけない、所詮、シドニーは宮廷人であり、売文家ではないのであった。

そして、シドニーは恐らく自分の書き物の文学的価値には不安はなかったかも知れないが、彼の作品の中には限られた少数の読者を除いて、世人の目を憚る内容が多く含まれていた。

シドニーは、作家として、〈写本文化〉あるいは〈祐筆・雄筆文化〉と呼ばれる事項の発達において決定的な役割を果たしたのかも知れない。ウッドホイゼンは、リチャード・ロビンソンという筆工をシドニーが信頼した者として特定している。1580年代にシドニーの依頼でこのロビンソンによって書写された。

折衷版『ペンブルック伯令夫人のアーケイディア』は、文学作品として整っていないし、主題的統一にも欠ける。にもかかわらず、壮大な作品であり、三百年以上に亘ってそのように見なされてきた。偉大な文学作品としてのその地位は否定できない。ただ審美的な作品統一という観点から見てシドニーの知的発展という観点は、間違っ無視されてきた。

『ニュー・アーケイディア』第一巻第十六章で、ファランタスは馬上槍試合を主宰し、それに参加する騎士たちは、各自が自ら崇める貴婦人として、その方々の肖像画を運んで登場するが、その中で「ラコニアの女王」について、「彼女は美の王国の辺境で生まれたらしい、彼女の容姿は美の王国の完全な所有者ではないが、かと言って、全くの異国人でもなかったからである。ともあれ、彼女は女王であるがゆえに美しかった。」と意味深な言い方をしている。これは、暗にエリザベス女王の事を指して書いているということが、分かる人には分かったであろう。ある意味で不遜な表現であったろう。シドニーが親しい人々以外には、読んで欲しくないと感じたと思われる理由の一端がここにある。

シドニーが戦地から帰国して、書き足したいと願って、信頼できる友人グレヴィルに託してオランダで戦没した後、「改訂版アーケイディア」は数奇な運命を辿り、『ペンブルック伯令夫人のアーケイディア』として、シドニーの意志を汲まずして出版される。そしてその作品は、大衆に迎合され、一七世紀に版を重ねてポピュラーな作品として受け入れられることになったが、前半と後半とで水と油的に異質の作品となってしまった。あの世でシドニーは、苦々しい思いで見守っていたのではあるまいか。

主要参考文献

Victor Skretkiewicz, Elizabeth Chaghafi & J. B. Lethbridge eds., *Sir Philip Sidney: The Countess of Pembroke's Arcadia: The New Arcadia, Second Revised Edition*, "The Manchester Spenser", Manchester University Press, 2024.

H. R. Woudhuysen, *Sir Philip Sidney and the Circulation of Manuscripts*, Clarendon Press, Oxford, 1996.

奥西 豊子

1608 年頃から 1614 年の間、ジョン・ダンの最大のパトロンであったのは、アン王妃の側近として宮廷で権勢を誇っていたベッドフォード伯爵夫人である。伯爵夫人の親戚であり友人でもあったマーカム卿夫人とブルストロード嬢が 1609 年に相次いで亡くなった際、ダンはそれぞれに 2 篇ずつ追悼の詩を残している。これらの詩は、ベッドフォード伯爵夫人が主催する文芸サークル内で回覧された可能性が高い。ただし「ベッドフォード伯爵夫人に捧げる哀悼詩」は、他の 3 篇とは異なり読み手に呼びかける形をとっており、多くの版において伯爵夫人に宛てた書簡詩として分類されている。

本発表では、マーカム卿夫人の死に際して書かれたとされる「ベッドフォード伯爵夫人に捧げる哀悼詩」が両夫人間の友情を主題とすることに注目し、ダンが、男性を対象とした古典的友情観に基づく表現を用いて、この 2 人の女性の友情を称揚することで、追悼の作品に相応しい故人への賛美と、読み手の伯爵夫人への賛美を両立させていることを考察した。

ダンは、両夫人を唯一無二の対となる友人だと描く中で、故マーカム卿夫人と伯爵夫人のそれぞれを、対をなす魂と遺体になぞらえる。天上に昇る魂を地上の遺体と対比する表現は哀悼詩で散見される。しかし本詩では、ダンは、古典的な友人の表現「もう 1 人の自己」を用いて、両夫人が入れ替え可能なほど似通っているとし、天地に別たれても 2 人に上下関係が生じないことを強調する。さらにダンは、両夫人間の友情を、切れずに伸びる純金になぞらえ、友情の永続性と両夫人の類まれな徳高さを示す。本詩の締めくくりにおいて、ダンは「ユディット記」を亡き友人の代わりとして提示する。「ユディット記」は、ユディットと女召使が協同し暴君を倒した偉業を描いており、女性への偏見と死に打ち勝つ両夫人間の友情を称揚するにも、宮廷で活躍するベッドフォード伯爵夫人を称えるにも相応しいモチーフだと考えられる。

主要参考文献

- Anderson, Penelope. “The Absent Female Friend: Recent Studies in Early Modern Women’s Friendship.” *Literature Compass*, vol. 7, no. 4, 2010, pp. 243–53. Wiley, <https://doi.org/10.1111/j.1741-4113.2009.00693.x>. PDF download.
- Brady, Andrea. *English Funerary Elegy in the Seventeenth Century: Laws in Mourning*. Palgrave Macmillan, 2006.
- Cicero. “De Amicitia.” *Cicero: De Senectute, De Amicitia, De Divinatione*, edited by G. P. Goold, translated by William Armistead Falconer, 1923. Harvard UP, 1979, pp. 108–211. Vol. 20 of Cicero, 28 vols.
- Donne, John. *The Anniversaries and the Epicedes and Obsequies*. Edited by Ted-Larry Pebworth, et al., Gary A. Stringer, general editor, Indiana UP, 1995. Vol. 6 of *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne*.
- . *The Verse Letters*. Jeffrey S. Johnson, general editor, Indiana UP, 2019. Vol. 5 of *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne*.
- Gowing, Laura. “The Politics of Women’s Friendship in Early Modern England.” *Love, Friendship and Faith in Europe, 1300–1800*, edited by Laura Gowing, Michael Hunter, and Miri Rubin. Palgrave Macmillan, 2005, pp. 131–49.
- Hall, James. “Judith.” *Hall’s Dictionary of Subjects and Symbols in Art*, rev. ed., 1979. John Murray, 1991, p. 181.

- Hardison, O. B., Jr. *The Enduring Monument: A Study of the Idea of Praise in Renaissance Literary Theory and Practice*. 1962. Greenwood Press, 1973.
- Herbert, Amanda E. *Female Alliances: Gender, Identity, and Friendship in Early Modern Britain*. Yale UP, 2014.
- Marotti, Arthur F. *John Donne, Coterie Poet*. U of Wisconsin P, 1986.
- Montaigne, Michel de. *The Essayes or Morall, Politike and Millitarie Discourses of Lo: Michaell de Montaigne, Knight Of the noble Order of St Michael, and one of the Gentlemen in Ordinary of the French king, Henry the third his Chamber*. Translated by John Florio, London, 1603. Internet Archive, archive.org/details/MontaigneImages.
- Ovens, Michael. "Alchemy and the Body/Mind Question in the Work of John Donne." *Conjunctions of Mind, Soul and Body from Plato to the Enlightenment*, edited by Danijela Kambaskovic, Springer, 2014, pp. 325–36.
- Pigman III, G. W. *Grief and English Renaissance Elegy*. 1985. Cambridge UP, 2006.
- Shannon, Laurie. *Sovereign Amity: Figures of Friendship in Shakespearean Contexts*. U of Chicago P, 2002.
- Summers, Claude J. "Donne's 1609 Sequence of Grief and Comfort." *Studies in Philology*, vol. 89, no. 2, spring 1992, pp. 211–31. JSTOR, www.jstor.org/stable/4174419. PDF download.
- . "The Epicede and Obsequy." *The Oxford Handbook of John Donne*, edited by Jeanne Shami, Dennis Flynn, and M. Thomas Hester, 2011. Oxford UP, 2016, pp. 286–97.

6. 担当

- * 本部事務局 : 金崎 八重
- * 本部会計 : 友田 奈津子
- * 東北支部事務局 : 川田 潤
- * 東京支部事務局 : 伊澤 高志
- * 関西支部事務局 : 西野 友一朗
- * 学会ホームページ委員 : 柴田 尚子

十七世紀英文学会規約

(名称)

- 1 本会は十七世紀英文学会と称する。

(目的)

- 2 本会は十七世紀英文学の研究を促進し、あわせて会員相互の連絡をはかることを目的とする。

(会の活動)

- 3 本会に本部と支部を置く。各支部は年数回の談話会等を開いて会員の発表・報告を聞き、研究情報等を交換する。
 - (2) 本部は総会を開いて重要事項を決定すると共に「ニューズレター」の編集刊行をする。
 - (3) 各支部は相互交流のために、年一回、談話会等に他支部所属会員を招聘することができる。その際には、本部会計より旅費（一律2万円）を補助するものとする。

(会員)

- 4 入会希望者は、各支部または本部に申し込んで会員となることができる。

(会長)

- 5 本会に会長をおく。
 - (2) 会長は会員の互選により総会で決定する。

(3) 会長の任期は2年とする。再任は妨げないが、再任は1回限りとする。

(顧問)

6 本会に顧問をおくことがある。

(2) 顧問は会員の総意により総会において委嘱する。

(組織および会の運営)

7 本会は会長の他に次の役員をおく。

本部幹事若干名 支部幹事各2名

編集顧問 編集委員若干名

会計監査2名 ホームページ委員1名

(2) 本部幹事は会員の互選により総会で決定し、支部幹事と合議の上で本会の運営にあたる。

(3) 支部幹事は各支部で選出し、本部に報告する。支部幹事は支部の運営の他に本部との連絡にあたる。

なお、本部幹事と支部幹事が重複することは差支えない。

(4) 編集顧問は編集委員会が委嘱する。

(5) 編集委員は、当分の間、各支部より2名選出するが、東京支部は3名とする。編集委員は編集会議を開き、「論集」の編集にあたる。なお、「論集」編集規定は別に定める。

(6) ホームページ委員は学会ホームページの管理・運営にあたる。

(会計)

8 本学会の経費は会費、寄付金その他の収入をもってこれにあてる。

(2) 会費は年額、本部会費3,000円、各支部会費（東京支部500円（学生会員を除く）、関西支部1,000円（学生会員を除く））とし、あわせて支部に納入する。本部会費3,000円は各支部により本部へ送付するものとする。

(3) 本部会計の決算報告は翌年度の総会において行なう。

(4) 会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日までとする。

(5) 本部会計は本部幹事がこれを統括し、会計監査がこれを監査する。

(規約の発効)

9 本規約は1984年5月12日より発効する。

(規約の改正)

10 本規約は改正の要が生じた時は総会においてはかる。

付則 本部所在地

本部の所在地は次のとおりである。

〒577-0813 東大阪市新上小阪228-3 近畿大学B館 経済学部 2G(金崎) 研究室 内

1988年5月21日一部改正／1989年5月20日一部改正／1996年5月25日一部改正／2010年5月29日一部改正／2013年5月24日一部改正／2017年4月1日一部改正／2018年4月1日一部改正／2018年9月8日一部改正／2022年9月18日一部改正／2023年9月16日一部改正